

## 漢代五言詩歌史の研究

柳川, 順子

<https://hdl.handle.net/2324/1398443>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 論文博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

|            |  |
|------------|--|
| 氏名・(本籍・国籍) | やながわじゅんこ<br>柳川 順子 (佐賀県)                              |
| 学位の種類      | 博士(文学)   |
| 学位記番号      | 文博乙第262号   |
| 学位授与の日付    | 平成25年8月31日   |
| 学位授与の要件    | 学位規則第4条第2項該当   |
| 学位論文題目     | 漢代五言詩歌史の研究   |
| 論文調査委員     | (主査) 教授 竹村 則行<br>(副査) 教授 柴田 篤 准教授 南澤 良彦<br>准教授 静 永 健 |

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、古詩と総称される漢代詠み人知らずの五言詩群について、隣接する詩歌との関係性にも言及しながら、その生成と展開の経緯を明らかにしたものである。古詩は、中国文学の主要ジャンルの一つである五言詩の元祖と目される作品群であるが、漢代に近い六朝時代末においてさえ、すでにその始原は未詳とされていた。他方、漢末の建安文壇に至ってにわかに興った署名付きの五言詩が、古詩に近似する表現を多く含んでいることは誰もが認めるところだ。このため、従来の説では、古詩の成立は建安文壇の形成時期に近い後漢後半期と見られていた。本論文は、この定説の形成過程、及びその論拠を洗い出した上で、これに替わる次のような新見解を提示する。

まず、古詩の中には古くから別格視されてきた一群が存在する。その詩群の輪郭を示すならば、六朝時代初めの陸機が「擬古詩」の模擬対象に取り上げ、かつ六朝末の詩論『詩品』において無条件に絶賛され、なおかつ同じ六朝末に成った詞花集『玉台新詠』に枚乗の「雜詩」として収録される諸篇だと言することができる。この一群は、多くの古詩が出揃った後に選りすぐられた佳作集なのではなく、五言詩展開史上、比較的早い段階でまとめられたものであり、各篇の成立時期はそれほど拡散しないと判断される。これを第一古詩群と名付けよう。そして、この特別な古詩群に属する一篇の詩が、後漢初期の傅毅の「舞賦」の中に、明らかな典故表現として踏まえられているのを認めることができることから、少なくとも第一古詩群に限っては、その多くが後漢時代の初め頃には既に成立していたと判断される。(第一章)

それでは、古詩の源流はどのあたりまで遡り得るだろうか。第一古詩群に属する諸篇は、宴席に離別の悲哀感情を提供する諸篇と、それを享受する宴という場そのものを詠じた諸篇とから成り立つと捉えることができる。前者は後者に先んじて成立していたと見るのが妥当だろう。他方、別れを詠ずる前者の詩が、八句か十句、もしくはその二倍の句数から成るのに対して、後者の宴の詩にはこの法則性が認められない。詩は元来、音楽と共に詠われる文芸であったことを踏まえると、より原初的な古詩は、第一古詩群の、句数に法則性を持つグループの中でも、八句か十句から成るものの中にあるはずだ。かくして割り出された古詩は、いずれも男女の離別の情を詠うものである。そして、その特徴的な語句や描出された事物から、それらの誕生は、前漢後期、後宮の女性たちを交えた遊宴空間においてであったと推定される。(第二章)

だが、第一古詩群の中には、友情の崩壊、出世への意欲、人生の無常など、恋情を詠ずる原初的な古詩からはかけ離れたテーマを詠ずる諸篇も存在する。このような諸篇が、比較的短い期間の中に出現し得たのはなぜだろうか。鍵を握るのは、それらが詠じられた場である。原初的な古詩を生み出した遊宴は、前漢中期以降、奢侈な社会風潮の広がりによって、宮廷外でも私的なそれが盛行し、そこには世に出る機会を求める無名の知識人たちが蝟集していた。古詩の担い手は、この宴という場を介して、後宮の女性たちから男性知識人層へ広がっていったと考えられる。他方、同じ時期、

死生観の変質に伴って、死者の住む陵墓の傍らでも世俗的な宴席が催されるようになっていった。死後の世界に言及する古詩は、このような空間で生まれたと推測される。(第三章)

第一古詩群を構成する個々の詩は、上述のような生成展開の末に、後漢前期の章帝期頃、一つの作品群にまとめられたと考えられる。この詩群の作者として、前漢の文人枚乗の名が冠せられたのはこの時だろう。ちょうどこの時期、枚乗の創始した文学ジャンル「七」がにわかに復興している。その人の作と銘打たれ、一連の作品群に編成された古詩は、知識人社会において、かつてない強い伝播力を獲得したはずだ。後漢中期以降、作者名の明らかな五言作品が急激に現れる不可思議は、こうした出来事を想定してこそ氷解するだろう。また、古詩との近似がしばしば指摘される、前漢の李陵と蘇武の名に仮託された一連の五言詩群も、この第一古詩群の編成時期と同じ頃、文人たちの集う宴席を舞台に作られたものだと割り出すことができる。(第四章)

ところで、従来、古詩との関係が論じられてきたジャンルに、古楽府と総称される漢代俗楽歌辞群がある。だが、「相和」と「清商三調」とに大別される古楽府のうち、古詩との間に直接的な影響関係が認められるのは、実は後者に限られる。古い由緒を持つ特別な歌曲群「相和」とは異なって、「清商三調」歌辞は、宴席で行われる俗楽の替え歌である。この俗楽歌辞と古詩とは、後漢のある時期以降、宴という場を介して相互に乗り入れるようになった。その結果が、両者間で共有される類似句なのだと推定される。従来は、民間歌謡である古楽府が洗練されて、無名文人による古詩が成ったと推論されてきたのであったが、この通説は見直す必要がある。(第五章)

古詩を中心とする漢代五言詩歌は、辞賦や四言詩といった正統派文学に平行して、宴席という娯楽的空間を舞台に展開してきた副次的な消閑文芸であるが、これを文学の表舞台に引き上げたのが漢末の建安詩人たちである。彼らの作品やその文学活動には、紛れもなく前代の宴席文芸の延長線上に位置づけられるべき要素が認められる一方、そこから外れる部分は、これより始まる中世貴族社会の徴候を示している。この文学史的地殻変動は、建安文壇の企画者である、後の魏の武帝曹操の、統治者としての卓越した先見性によって企てられたものであった。(第六章)

さて、五言の詩型は、先行研究により、南方の長江流域の俗謡に発祥することが明らかにされている。だが、この地域に位置する三国呉の知識人たちは、身近な民間歌謡に脈打つ五言のリズムに価値を認めず、上述のような中原の文学的新動向にも無関心であった。ところが、祖国の滅亡後、彼らが参入した中原の貴族社会では五言詩が盛行しており、その中でも別格の一群は、前漢初期の南方出身の文人、枚乗の作とされている。このことを明敏に受けとめたところに成ったのが、第一古詩群のみをまるごと模擬対象とする、呉人陸機の「擬古詩」であった。(第七章)

以上のような論述内容を持つ本論文は、これまで見過ごされてきた漢代文学の隠れた一面を切り出し、この漢代五言詩歌を継承して展開した六朝時代の詩歌について、その本質を歴史的に捉えるための基礎的考察材料を差し出すものである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、従来「古詩」と称して伝承されてきた漢代の詠み人知らずの五言詩群の生成と展開について、新しい見解を提示したものである。本篇第七章の概要は以下の通りである。

第一章は、古詩群のうち、陸機が「擬古詩」の対象とした諸篇を、新たに「第一古詩群」として考察する。そしてそれが後漢初期の傅毅「舞賦」の表現を踏まえることから、第一古詩群の成立時期を、旧説のように後漢後期ではなく、後漢初期まで遡り得るとする。

第二章は、古詩の源流について検討する。第一古詩群中に更に原初的古詩を析出し、音楽性・娯楽性・女性性の観点から、古詩が詠まれた宴席においては宮女や音楽を伴っていたとする。このことから、原初的古詩が前漢後期の宮女を交えた宴席において成立したことを結論づける。

第三章は、原初的古詩群の展開について述べる。前漢中期以降、宮廷内外の宴席において無名の男性知識人が古詩の担い手となったと考えられる。また死生観の変質に伴い、皇帝の陵墓の傍らで死者を祀るために世俗的な宴席が開かれたことも、古詩が詠まれた場の発展として注目する。

第四章は、後漢における古詩の伝播と展開について述べる。第一古詩群の諸篇は後漢前期の章帝期頃に作品群に纏められたと考えられる。作者を一に当時有名であった前漢の枚乗に仮託するのは、傳毅の所為であった可能性がある。また前漢の李陵と蘇武作とされる五言詩群も考察の参考になる。

第五章は、古詩と古楽府の関連について論述する。漢代俗楽歌辞である古楽府のうち、宴席における俗楽の替え歌である「清商三調」歌辞は、古詩に密接に関わるものである。民間歌謡の古楽府が洗練されて無名文人の古詩が成立したとする従来通説は見直す必要がある。

第六章は、後漢末の建安文壇と古詩の関連について述べる。建安文壇は漢代五言詩歌史の連続性の上に新局面を展開したのであり、最大の企画者たる曹操（武帝）は統治者としての卓越した先見性によって、それまで副次的な消閑文芸であった五言詩を新たに文学の表舞台に引き上げた。

第七章は、陸機の「擬古詩」に拠り、呉の文人たる陸機からみた中原の五言詩歌史を展望する。五言詩型は南方長江流域の俗謡に由来するが、陸機が祖国呉の滅亡後に身を寄せた北方中原では、南方出身の枚乗作とされる第一古詩群を含む五言詩が盛行していた。この章では陸機の「擬古詩」を漢代五言詩歌の発展史の観点から論じる。これは従来陸機研究に無かった斬新な視点である。

以上が本論文の概要である。本論文が研究対象とする漢魏六朝時代は、中国文学史上屈指の文学隆盛の時代であるが、経年と共に多くの資料が失われ、今日に断片資料のみが伝わる場合も多い。論文の提出者はそれらの関連資料を正確に読解し、先行研究を丹念に踏まえ、当時の社会制度や文壇の趨勢をも考慮に入れつつ、創見に富む明解な文章で以て今日可能な限りの解釈と論述を試みた。

本論文の新見解として、漢代五言古詩中に第一古詩群を析出したこと、その作詩時期を従来の後漢後期から前期にまで溯らせたこと、陸機の「擬古詩」を漢代五言詩の展開上から再検討したこと等が挙げられる。これらの新見解については今後学界での賛否両論の反応が予想されるが、いずれも先行研究を丹念に把握した上で、関連資料を駆使して論理的客観的に展開されており、仮に反論があっても、本論文の研究成果が相応に評価され、学術研究の進展に寄与することは確実である。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであることを認める。